第二次世界大戦中のイギリスの集団学童疎開と児童文学への展開

Evacuation during WWII and Children's Literature in Britain

川　端　有　子*
Ariko KAWABATA

要　約　第二次世界大戦において大都市から子どもたちを集団疎開させるプログラムが実行されたのは日本だけではない。この小論は，イギリスにおける集団学童疎開の史実と，それを記述する体験者の手記，そしてそこから創作された児童文学を考察することで戦争体験のフィクション化の過程を検討する今後の議論のための序論としたい。

キーワード：集団学童疎開，イギリス，第二次世界大戦，児童文学

Abstract　Even before World War II was declared, the British Government had planned the evacuation of schoolchildren, mothers with infants, expecting mothers, and the handicapped out of the big cities and into the safe countryside. More than 3 million children were evacuated during the 6 years of the War.　This national effort had an extensive and profound impact, and the evacuation is often said to have completely changed British social welfare and education systems.　The evacuated children grew up, and several years after the War they recounted their various experiences in notes and in fiction.　In this paper, I will follow the timeline for the evacuation and examine how those experiences produced what is known as evacuation literature, and especially that for children.

Key words：Evacuation Schoolchildren, Britain, World War II, Children's literature

はじめに

突然に世界を襲った新型コロナウィルスの波は，さまざまな点において，今まで不可視であった事柄を白昼のもとに晒すことになった。そのなかでも子どもたちに何よりも大きな影響を与え，子どもたちにとっての学校の意義について，見直しの契機を与えることになったのは 2020 年 3 月，突然決定が下された小・中・高の臨時休校措置であった。高校はともかく，義務教育が突然ストップするという未曽有の出来事に，現場が混乱したことはいうまでもない。子どもたちが日中は学校にいることが前提で作られてきた日常生活は，あっという間に崩壊し，昼間の居場所としての学校を閉ざされた子どもたちは行き場を失った。また，主たる栄養源としての給食を取り上げられ，栄養不足に陥る子どもの貧困についても，あらためて認識させられることになった。

政府の決定に，子どもたちの生活が左右され，教育の場が覆されて混乱に陥るという状況を目の当たりにして，私が思い出したのは，第二次世界大戦中の学童疎開である。私の母は小学校 4 年生で縁故疎開をして，空襲の神戸から岐阜の田舎に移り住み，結局帰らずにそこで育ったという世代である。私は子どもの頃から，戦時中の学童疎開についてはおとなから経験談を聞いたり，経験者の手記やそれをもとにした児童文学作品を読んだりすることで，ある程度の知識を持っていた。だが，2020 年からのコロナ禍における状況は，より一層鮮明に，大きな災禍が子どもたちの世界を左右するという共通性を浮かび上がらせた。このことが，かねてより興味を持っていた子どもたちの疎開経験と児童文学という

*　家政学研究科児童学専攻
Graduate School of Home Economics, Division of Child Studies

テーマに，あらためて向き合う契機になったといえる。

1　イギリスにおける集団学童疎開

第二次世界大戦時に，集団学童疎開を行った国は，イギリス，ドイツ，ソ連，日本の４か国である。それぞれの国で行われた疎開は，目的は同じでもそれぞれに国ごとの違いが大きく，それは翻ってそれぞれの国が子どもについてどう考えていたか，子どもの教育や福祉をどう捉えていたかをあらわに示すものであった。また，疎開政策が戦後の社会に与えた影響についても，非常な違いがみられる[1)]。

イギリスの児童文学を研究するうえで，第二次世界大戦時の集団学童疎開を扱ったものがかなり存在するということはかねてから気づいていた。実際に経験した世代が執筆したものから，その子どもの世代の手によるもの，また手記に近いものから，純然たる創作作品，または集団疎開を物語の設定上の装置として使うものまでに広げれば，かなりの数が思い浮かぶ。

教師に連れられ。荷札をつけられ，荷物のように汽車で運ばれた朝。両親から遠く離れて暮らすことになる子どもや，きょうだいの日常，初めて知る家族以外の家とその家庭生活。始めて見る田舎での体験と養父母との関係。町にいる親への心配と手紙のやり取り。時には受け入れ先の家を転々としなければならなかったり，長期にわたる別居のため，両親やきょうだいとのなかが疎遠になったりすることもあった。とりわけイギリスの場合，戦争という非日常のシチュエーションは，普段触れ合うことのなかった２つの階級の間の壁を取り去ることにもつながった。

終戦間近に強行され，都市も地方も食糧不足に悩まされていた日本の集団学童疎開の体験には，戦争を遂行した大人への怒り，信じていたものを裏切られたという痛みが強く込められている[2)]。戦争の悲惨さを訴え，二度と繰り返してはならないという強いメッセージに異を唱えるわけでは決してない。しかし，戦争体験に描き方に型にはまったものを感じずにはいられない[1]。

イギリスの学童疎開文学に多様性があるのには，もちろん理由がある。第二次世界大戦の勝利国であるイギリスは，戦争について反省する必要はなかった。この戦争は，ナチスドイツに対する民主主義国家の勝利であり，何よりも祝するべきものだった。個人的には戦争反対の思想を持っていても，また，個人的に危険にさらされたり，家族が犠牲になったりしたことを悼んだとしても，大局的には誇らしい結果だったのだ。イギリス人には戦争を二度と繰り返さないと誓う必要はないのである。

一方で，イギリスの学童集団疎開は，全期間で６年間。疎開した子どもの数も，日本の 40 万人に比べてはるかに多く，300 万人にのぼる。そのせいもあってイギリスの集団学童疎開（に関わる）文学は多彩である。おとなの都合で振り回される子どもの受難の話にもなりうるが，思いがけない出会いと幸運の話にもなる。子どもの成長物語にもなりうるし，子どもの，親元を離れた冒険のきっかけにもなりうる。また，階級間の対立と葛藤の物語にもなるし，義務と本音のあいだで右往左往する人々を皮肉る物語にもなる。背景に，この時期の都市と地方のあり方の変遷を描くことにもなるし，階級の関係のゆるやかな変化の兆しを書き込むことも可能である。

何よりも，この集団学童疎開が，戦後の福祉政策と中等教育の拡充をもたらしたという言説は，ニコ・ゲルトナーなどの研究者の間では否定されながらも，いまだに人々の間では根強く広まっている「神話」といっていい[3)]。この，大衆のイマジネーションに訴えかける説は，それゆえに，事実とは別に重要視すべきものだといえるだろう。

この小論では，イギリスの集団学童疎開についてのあらましをまとめ，それにかかわる様々なドキュメントを分類する。そのうえで，児童文学においての展開を概観する。そのうえで，今後，続けて検証していく「疎開文学」についての研究の序説としたい。

2　歴史的経過

イギリスの集団学童疎開「パイドパイパー作戦」は，ドイツへの宣戦布告に 2 日先立って，1939 年 9 月 1 日に決行された。疎開した子どもたちは疎開先の新しい屋根の下で開戦を迎えたのである。イギリ

[1] 日本の場合，都会に住む 40 万人の小学生が集団疎開の対象になったが，それはもう終戦に近い 1944 年 6 月のことで，集団疎開そのものが 1 年くらいしか続かなかった。

スでは，第一次世界大戦でドイツの空軍に空襲を受け，民間人に大きな被害を出したことを覚えている人はまだ多かった。次に大戦が起これば，空からの爆撃でイギリスの大都市や港が被害を受け，大混乱が起こるであろうことは極めて容易に予想できた。しかも，30 年代に入ってから，イタリアのアビシニアへの毒ガス攻撃，日本の上海への空爆など，危機が迫っていることが明らかになっていた。決定打となったのは，1937 年の，ドイツによるスペインのゲルニカ空爆である。

1938 年から，政府は保健省と教育委員会を中心に疎開準備委員会を結成，会議が繰り返し行われた。最初は空襲によるパニック・コントロールについてばかり議論していた委員会も状況が差し迫ってくると，300 万から 400 万人の人々を 72 時間でロンドンから連れ出す試案を作成し，一方では都市住民に向って空襲対策を呼び掛け，ガスマスクを配布，各家に防空壕を作ることを指導した。

イングランドとウェールズは，疎開地域・中間地域・安全（受け入れ）地域の３つに区分けされた[2]。疎開地区に含まれるのは，ロンドンおよび北部の大都市と工業都市，それに南部の港湾都市である。これらの住民は，安全地域と定められた地方への疎開を推奨された。できる限り自主的な縁故疎開が優先されたのである。だが，政府主導で支援を伴った集団疎開の必要性が認識され，疎開準備委員会は，実行されなかったものも含めると，1938 年のプラン１から 1944 年のプラン７までの計画を作成した[4)]。

プラン１はあまり知られていないが，実は本格的な集団疎開の１年前の９月，ミュンヘン危機に際して 1500 人の障碍のある子どもたちを短期間疎開させたというものである。イギリスの疎開計画には，このように障碍を持った子どもたちや，視覚障害等の成人（プラン 2 に含まれていた）をも対象としていたという特徴がある。

プラン２が最も有名でかつもっとも大掛かりなもので，1939 年 9 月 1 日から 4 日にかけて，130 万人以上が疎開地区から安全地区へと公共交通機関で移動した。この疎開の対象となったのは小・中学校の生徒，幼児を連れた母親，妊娠中の女性，視覚障害などを持つ成人である（実際には視覚障碍者の参加はなかった）。交通費は国が負担したが，疎開者は最大で 6 シリング程度の負担金を支払うことになっていた。経済状況や様々な事情を鑑みて，負担金を免除された人々も 25%にのぼった[5)]。

何度もの議論の末，集団疎開は強制ではなく，個人の選択に任せることが原則となっていたが，計画の周知徹底のため，パンフレットが作られ，戸別訪問や学校での啓蒙などが行われていた。当日は，列車や船舶などの交通機関が独自の輸送計画を駆使して，いっせいに，歴史上かつてない規模の人数が一斉に国内を移動した。とはいえ，当日教師に引率されて現れた生徒たちの数は，政府の予想をはるかに下回っていた。まだ始まってもいない戦争の，見たこともない空襲に具える実感がわかなかったこと，政府の予想以上に親が子どもを手放したがらなかったことが理由として挙げられる。

当日朝，登校した生徒は，教師とボランティアの世話係に付き添われて駅へ向かい列車に乗った。教師に課せられた仕事は大きく，引率のみならず生徒たちと共に疎開し，疎開先での教育にも責任を持った（当然，疎開地区にあった学校は閉鎖である）。行き先を教えられずに出発した生徒たちは，落ち着く先が定まってから，はがきでその旨を親に連絡するよう指導されていた。駅名や地名表示すらも，敵軍に知られないようにと取り外されていた。この日の，ガスマスクの入ったボール紙の箱と身の回りのものが入ったトランクかリュック，首には名前を書いた迷子札，片手にテディベアを抱いた疎開児童の姿は，多くの写真に残されており，その姿は長く人々の心に残った。マイケル・ボンドは，自伝『クマとご先祖（未訳）』（*Bears and Forbears*，1996）の中で，ニュースリールで見た疎開児童の姿が心に残り，『クマのパディントン』執筆の際，パディントン駅で引き取ってくれる家族を待ち受ける主人公のクマにこのイメージを重ねたと述べている[6)]。

都市からの脱出計画は中央政府が策定したものの，受け入れ先については，地方自治体への丸投げであったことは，さまざまな混乱を生んだ。受け入れる安全地区では，38 年に結成された WVS（Women’s Voluntary Service）が疎開者の配分を担った。イギリスの特徴の一つは，個人宅が空き部屋１室に１人を原則に疎開者を受け入れたことである。集合住宅的な施設やキャンプも作られたが，生

[2] UK の中でも北アイルランドとスコットランド地方はこれとは独自の疎開政策を取った。

徒や子ども連れの母親などを受け入れたのは，ほぼ個人宅であった。

WVS はこの日に先駆けて，個別訪問を繰り返し行い，協力を要請して準備にあたっていた。受け入れ先家庭は，子ども一人の場合 10 シリングの支援金を受け取ることになっていた。支援金は人数により加算され，のちには年齢に比例して変化をつけるなど，何度も改訂された [7)]。中にはこの支援金と子どもがもってくる配給手帳目当てに子どもを預かり，劣悪な環境に放置する不心得者もいて，そこに振り分けられた子どもは悲惨な体験をすることになる。地方の農家は，仕事の手伝いになりそうな年上の男の子を好んで引き取りたがり，きょうだいが一緒だと敬遠しがちであった[3]。到着した駅で，引き取り手が現れないまま待たされる子どものつらさは，経験者の手記にしばしば現れる。

こうして一回目の大移動が行われたのだが，宣戦布告のあと一年ほど，具体的な空爆はほとんどなく，イギリスは俗に「まやかしの戦争（phony war）」と呼ばれる時期を経験する。そのため，疎開した人の半分弱がもとの疎開地区に戻ってきてしまった。迫る危機を感じられなかったことや疎開先への不適応が理由として挙げられている。幼児を連れた母親層ではとりわけ，受け入れ先の家庭とうまくいかなかった場合が多い。学童の場合，政府が予想した以上に，戦争の恐怖より親と子の別離が耐えがたいとの考え方が強かったのだ。

疎開が適応されたのは公立の小・中学校が中心であり，その生徒は多くの場合労働者階級に属していた[4]。中流階級の親は，わりあい子どもを寄宿学校に入れたり，キャンプや旅行に行かせたりする経験もあり，子どもと別々で生活することに拒否反応を示さない。しかし労働者階級においては，家族の協力のもとに生活が営まれており，より緊密な絆が存在していた。子どもの不在は生計にも関わってくる。そのため，実際に空襲がないとみると，多くの親が子どもたちを呼び戻してしまったのであった。ロンドンなどの疎開地では小・中学校が閉鎖され，教師も疎開してしまっていたので，戻ってきた子どもたちは初等教育の場を奪われてしまった。野放しになった子どもたちの間で少年犯罪が増え，しかも空襲が始まったときにはその被害に巻き込まれるという結果を招いてしまった。もっとも疎開したままとどまった子どもたちには，空襲被害はほとんどなかった。

しかし 1940 年の 6 月になるとナチスドイツはフランスを占領，今度こそ迫る危機に，イギリス政府はプラン 4 を遂行した。このプラン下で疎開したのは約 10 万人の学童である。プラン 2 での受け入れ先が，わりあい近郊であったのに対し，こちらではウェールズ地方やコーンウォールなどの比較的遠隔地が選ばれた。また，このプランには成人は含まれていなかった。

プラン 5 は 1940 年秋から始まった，いわゆる「ロンドン大空襲（Blitz）」の間，週ごとに付き添いなしで子どもたちを安全地域に送り届ける計画であった。同時期，幼児連れの母親と妊娠中の女性に適応されたのがプラン 7 である。

このほかにも，経済的に余裕のある家庭は，知り合いを頼って海外へ子どもを疎開させることもあった。政府主導の疎開計画には，行先として海外のカナダやアメリカ，オーストラリアも含まれていたのだが，1940 年，子どもたちを乗せてカナダへ向かう船舶・シティ・オブ・ベナレス号がドイツの潜水艦に攻撃され，疎開児童 77 人を含む大勢の死者を出して以来，海外への集団疎開は全面停止となっている。

1939 年から 1945 年，最長 6 年間の疎開生活をした子どももいた。その間には様々なドラマが生まれた。都会から出たことのなかった子どもが初めて田舎を見，田舎の生活をする。牛乳がどこから出てくるのか知らなかった子どもたちが農場の手伝いをし，煤煙で汚れていない空気のもとで育つことになった。逆に，上下水道もなく電気もないコテージで野外のトイレにとまどい，慣れない生活にホームシックが重なって非常に苦労した子どももいた。子どもを受け入れた人々は，都会の労働者階級の子どもの言葉や乱れた生活習慣，シラミや種々の病気に驚いた。ナイフやフォークを使ったことがない，ちゃんとした寝床に寝たことがないというような低所得層の子

[3] 疎開のグループは学年別だったが，きょうだいがいる場合は，一緒のグループに入ることができた。きょうだいが幼児であれば母親と一緒に疎開することも可能だった。

[4] イギリスでは私立学校へ通う生徒が多いのだが，私立学校はその状況が多岐にわたるため最初は集団疎開に参加しなかった。のちのち，学校により参加するところも現れた。

どもたちの現状が，国民の福祉への関心を高める結果となった―これが，よく語られる疎開「神話」である。

一方で，都会で親をなくしたり，居場所がなかったりする子どもが宿泊先に戦後もとどまり，家庭を得たという話もあれば，養い親から虐待を受け，心の傷を負ったという例もある。5歳から15歳の多感な時期，親元を離れていた子どもたちは戦後家に帰ったあと適応するのにも様々な葛藤を経験することになった。

このようなイギリスの集団疎開，とりわけ学校生徒の集団疎開は大きくとらえて3回実施されたのだが，結果的に成功に終わったと言えるのだろうか。疎開した子どもたちは少なくとも空襲を免れ助かった。しかし，戦後家に帰った子どもたちにしろ，それを迎えたおとなの側にしろ，「物事は二度と再び元には戻らなかった」とマイク・ブラウンは述べている[8)]。また，ニコ・ゲルトナーは，これを政策的には失敗であったと位置づける。一つには，予想されただけの人数の参加がなかったこと。これは計画を立てた側の，疎開者に対する理解の浅さを露呈したという理由がある。パブリックスクール出身の官僚には，労働者階級の家族関係がよく分かっておらず，また女性・子どもに対する視点も欠いていた[9)]。もう一つには，結局のところ疎開生活を全うせずに引き返してきた人が多く，結果的に子どもたちの初・中等教育を保証することができなかったうえ，その生死をロンドン大空襲に晒すことになってしまったということだ。

しかしこの「パイドパイパー作戦」は，戦後，子どもにとっての小・中学校教育および障碍児教育の重要性を再認識させ，その教員の境遇を向上させることに繋がった。また，新しく力を得始めた労働者階級が，政府に対して不満を主張する声を得るきっかけともなった。それらの点で，学童集団疎開はやはり戦後社会を迎えるうえで，子どもの教育や福祉に大きな影響を与えたことは間違いないとゲルトナーは述べている[10)]。

考えてみれば，「パイドパイパー作戦」というのは奇妙なコードネームである。実際，ここに違和感を覚え「皮肉なネーミング」だと述べているひとも多い。なぜならこれは敵国ドイツの伝説「ハメルンの笛吹男」から来ているからだ。この話は，イギリスでは 19 世紀の詩人・ロバート・ブラウニングの詩によって人口に膾炙していたし，ケイト・グリーナウェイの絵本も有名である。ミステリアスな笛吹男が，ネズミを退治した報酬を払ってくれないハメルンの町の人々への仕返しに，子どもたちを笛の音でさそって連れ去り，二度と帰ってこなかったというその結末を知らない人はいなかっただろう。ゲルトナーは，整然と列を作って子どもたちを移動させるというイメージから，おそらくは，軽いのりでつけられたのだろうと推測している。ハメルンの町では，笛吹きについていくことができなかった足のわるい男の子だけが街に残り，命を助かったのであったが，「パイドパイパー作戦」は，足がわるいなど障碍を持った子どもたちをも含んでおり，その存在を公に新たに認識させたといえる。

3　イギリスにおける集団学童疎開文学の分類

ゲルトナーのような歴史叙述に加え，集団学童疎開について書かれた文書として圧倒的に多いのは，経験者による手記，またはその近親者による聞き書き，または経験者へのインタヴューに基づく書物である[5]。それらは疎開を子どもとして経験した回想が大半を占め，体験したものの証言としての重みを持っている。また，そのシチュエーションも，イーストエンドに住むユダヤ人少年の場合，両親がドイツから避難してきたユダヤ人一家の場合，アイルランド系カトリックの少女の場合，ガンジー島に住んでいた子どもの場合，また，海外へ船で集団疎開した子どもたちの場合など，多岐にわたる[6]。だが，それらは戦後すぐに著されたのではなかった[11)]。

1988 年，他に先駆けて経験者のインタヴューを行い，手記を集め編集したのが，ベン・ウィックスの『ぼくたちの戦争―イギリスの学童疎開』である。この中で彼は，なるべく多くの証言を集めようと新聞 30 紙に呼びかけたところ，国内だけで 8 千件の

[5] 特筆すべきは日本において主婦の読書会「イリスの会」が 1993 年に出版した『切りとられた時―イギリスとドイツ第二次世界大戦下の学童疎開』（阿吽社）である。前章でも参考にしたこの本の中では，著者たちはイギリス・ドイツにインタヴューを送り，現地で公文書をリサーチし，二つの国での疎開について内容の濃い書物にまとめている。

[6] ガンジー島はチャンネル諸島に属する島であるが，この諸島はイギリスの中で唯一ナチスドイツの占領下に置かれ，島民の半数以上が船でイギリス本土へ集団疎開することを余儀なくされた。

問い合わせが殺到したと述べている[12]。ウィックスは自分自身も疎開経験者であったが，この本を上梓するにあたって，これまで（つまり 1988 年まで）当事者である子どもたちの経験は無視され，知られていなかったと述べている。「手紙やインタヴューを通じて，この子供たちは今やっと証言の機会を得たのだ」と[13]。おそらくこの頃には疎開児童であった人々が大人になり，子ども時代の経験を書くだけの心の余裕を得たのだろう。

ウィックスがこの書物を通じて成し遂げたのは「疎開に参加した人々の心の奥深く隠され，と閉ざされたままになっていたイギリスの現代史の一分野の全容を解く鍵」をつまびらかにすることであった。その後，続々と経験談，回顧録，自分自身を三人称の主人公に見立てて小説風にしたものなどの出版が相次いだ。とりわけ戦後 50 年が経過した年や，疎開経験者が高齢に差し掛かった 2000 年代に，出版が増えているのが特徴的である。国民的トラウマとなった６年間の疎開経験は，語られるまでにある程度の時間が必要だったのであろう。

これらの手記には，もちろん偏りがあったり，大局が見えていなかったり，歴史家の目からは誤りと考えられる部分も含まれている場合がある。例えば，ウィックスの著作の冒頭には，「ミッキーマウス型のガスマスク」への言及があるが，この幼児向けのガスマスクは，39 年にはまだ開発されていなかった[12]。片手にテディベアを抱え，ミッキーマウス型ガスマスクを首にかけ，スーツケースを引きずる幼子というのは，長らく一般に普及した学童疎開児のイメージであるが，これは作り上げられたイコンなのである。

また，多くの人々が，階級制度が変形し始めたきっかけと，戦後の英国の社会福祉制度の始まりを，集団学童疎開による都市と田舎の半ば強制的な交流に求めている。これは，先にも述べたように歴史的に見てあまり正確ではない説なのだが，大衆的想像力には非常に魅力的に訴えかける神話となって，これらの手記からあふれ出している。そして，それは明らかに，疎開についてのフィクションに大きな影響を与えた。

4　フィクションの中で

疎開者を扱った文学作品も多く存在する。大人向けの一般文学では，イヴリン・ウォーの『もっと国旗を（未訳）』（*Put Out More Flags*，1941）が挙げられる。疎開児童を受け入れる側の大人たちの困惑ぶりを皮肉に描いた小説である。しかしやはり子どもを主人公にすることが多い児童文学には，それ以上にたくさんの例が見受けられる。

戦時中のカーネギー賞受賞作品は，キティ・バーン『ロンドンからのお客さま（未訳）』（*Visitors from London*, 1940）という作品で，大都市から地方へ疎開してきた子どもたちのことを扱っていた[7]。おそらく同時代の子どもたちには非常に親しいテーマであったと思われるのだが，同賞受賞作品の中では一番早く絶版になった本であるため中身をまだ確認できていない。

翌 41 年，同賞を受賞したのがメアリー・トレッドゴールドの『あらしの島のきょうだい』(*We Couldn't Leave Dinah* , 1941)で，ナチスドイツ占領下のチャンネル諸島のある島を舞台として，島の住民が集団疎開したさい，偶然島に取り残されてしまったきょうだいを描く物語だ。彼らは備蓄の食料をもって岩山の洞穴に隠れひそみ，敵兵の目を欺いてサバイバル生活を楽しむのみならず，二重スパイの存在を暴くという活躍を見せる。疎開文学というと期待されるような，別離や孤独を描いたものではなく，わくわくする冒険小説風の内容で，ある意味，愛国的・好戦的な内容ともいえる。ここでは親がいないことは，子どもたちに普段はできないようなサバイバル生活やスパイ内偵作戦を可能にする契機になっており，疎開という経験を大人がいない世界を想定するための装置として使う，のちのち現れる文学的コンベンションの先駆けとなったと思われる。

40 年代に活躍した児童文学作家ノエル・ストレトフィールドは非常に多作であるが，その作品中には，今でもイギリスの小学校で，戦時中の疎開生活を知る本の一冊として挙げられる『サイレンが鳴り響くとき（未訳）』（*When the Siren Wailed*, 1945）がある。彼女は大人向けの小説でも疎開を扱った『若木（未訳）』（*Saplings,* 1945）を著した。

『サイレン…』と並んで，疎開ものの代表とされ

[7] ルース・アレン著・こだまともこ監訳『賞を取った子どもの本～70 の賞とその歴史』玉川大学出版部，2009.

るのが，ニーナ・ボーデンの『帰ってきたキャリー』（*Carrie's War*, 1973）だ。ニーナ・ボーデンは，自らがウェールズに疎開した経験があり，70 年代になると，かつての疎開児童やその同時代を子どもとして過ごした世代が，その経験をフィクション化するようになるわけである。ボーデンの作品は，戦後 30 年たって，母親となった主人公が子どもたちを連れ，むかし疎開していた町を再訪，思い出を語るという枠入りの物語になっている。この物語が傑出しているのは，主人公キャリーが抱えているトラウマが，疎開による別離や戦災によるものではなく，むしろ自分自身のちょっとした思い違いと過ちが，大好きな人々を傷つけてしまったという思いにあるという点であり，回想という枠組みと，子どもの視点という二重の遠近法により，イギリスの歴史を黒人奴隷売買の時代，ケルトの信仰，鉄器時代にまでさかのぼり仄めかすという深さにある。ボーデンは，この作品で 1993 年のフェニックス賞を受賞した。時代を 20 年先取りしていた作品に与えられる賞である。

1980 年代になると，ミシェル・マゴリアンが，戦時中に取材した児童文学作品を多数著している。その中でも最も有名なのは『おやすみなさい，トムさん』（*Good Bye Mr Tom*, 1982）であろう。ロンドンで母親に虐待を受けていた少年が，疎開先の田舎で孤独な老人に引き取られ，お互いに新たな家族を得るという，心温まる物語である。マゴリアンは他にも『カッコーの巣の中で（未訳）』(*Cuckoo in the Nest,* 1988)で，疎開によって自分の出自の階級を抜け出すチャンスをつかんだ労働者階級の少年が俳優を目指す物語を書いた。これらの物語の底辺には，集団学童疎開が階級の交流を招き，戦後の社会福祉を促進したという「神話」が透けて見える。

また，マゴリアンは，『バック・ホーム（未訳）』（*Back Home,* 1984）では，アメリカに疎開していた少女が帰国して直面する家族の危機を描いた。ボランティア経験から社会参加に目覚めた母親，姉を知らない弟，復員して戦前の家族の規範が復活するのを望む父親，伝統的な家族観を強要する祖母。そして一度アメリカの自由な空気に触れた主人公は，戦後のイギリス社会にどうしてなじめない。戦争によりばらばらになった家族は，戦争のもたらした変化のあとで，もう元には戻らないのである。

これらの小説は，すべてリアルに子どもたちの日常や心理を描いたリアリズム作品に分類できる。しかし疎開に言及する児童文学はそれだけではない，疎開経験には，「不本意な旅」「強制的な親との別離」「こどもだけでの異世界／社会体験」などが付随してくる。「学童疎開」は，歴史的事実としてだけではなく，しだいに，子どもの日常にこれらの要素を導入する装置，先述した文学的コンベンションとして使われるようになっていくのでる。

C.S.ルイスの有名なファンタジー，『ライオンと魔女』（*The Lion, the Witch, and the Wardrobe*, 1950）では，たった一行ではあるが，ペベンシーきょうだいがなぜ親元を離れて人里離れたお屋敷に暮らすようになったかが説明され，ロンドンの空襲を避けて彼らが疎開してきたことが示されている[8]。その後，4 人のきょうだいの活躍の場は，架空の国ナルニアとなり，戦時下の状況は言及されないため，この疎開という導入は，設定のために使われたものと考えてもいい。[9]同様に，ダイアナ・ウィン・ジョーンズの『時の町の伝説』（*The Tale of Time City*, 1984）においても，主人公が架空の世界に入り込むのは，彼女と弟が学童疎開のための列車に乗っていた時のことである。

また，近年アメリカの歴史小説の作家が，イギリスの第二次世界大戦中の疎開経験をモチーフに，ロンドンの貧民街に生まれ，足に障害を持った女の子が生きる場を見つけていく物語を描き出した。『わたしがいどんだ戦い　1939 年』（*The War that Saved my Life*, 2015）とその続編の『わたしがいどんだ戦い　1940 年』（*The War I Finally Won*, 2017）である。作者のキンバリー・ブルベイカー・ブラッドリーは 1967 年生まれで，これまで挙げた作家とは違い，もちろん戦後生まれである。ブラッドリーは，学童集団疎開によってメリットを受けたという子どももいたのではないかと考えて，この物語を書いたと述べているが，この二つの作品は，まさに疎開は戦後の社会福祉を促進したという，例の神話の繰り返し

[8] 小説内のこのきょうだいは，縁故疎開であるが，オックスフォードに暮らしていたルイスは，1939 年，数人の学童疎開児を家に受け入れている。
[9] もちろん白の女王が独裁者を表し SS のような秘密警察を使ってナルニアの住人を脅かすのはナチスを思わせる状況ではある。

になっていることが指摘できる。

まとめ

現在，小学校の生徒向けに，戦時下の子どもたちの生活を紹介するハンドブックふうの副教材も多数出版されている。サイモン・スミスの『疎開っ子になんかなりたくない！（未訳）』（*You Wouldn't Want to Be a Second World War Evacuee!*, 2020）は，イラストを使って「忌々しいヴァッキー」と呼ばれていた疎開児童の日常生活や防空壕，ブラックアウトなどを説明している。アメリカへ疎開した友だちとロンドンに残った少女が文通しているという設定で，2つの国での生活の比較を示した本が，ガレス・コンウェイの『わたしの友だち疎開っ子（未訳）』（*My Best Friend the Evacuee,* 2019）で，戦時中の記憶が失われつつある今，イギリスにおいても集団学童疎開の記録を子どもたちに残そうという動きが活発であることが感じられる。

その方法や，テーマの取り扱い方は，戦争児童文学のあり方を考え直すきっかけになりはしないか。また，現在にも起こりうる，公権力の子どもたちへの影響を考えるうえでも示唆を与えてくれるのではないか。

ここに挙げたほかにも疎開を扱う児童文学はまだまだ存在するはずで，この小論を序説として，今後リサーチと分析に努めたい。

引用文献

1）イリスの会編・著：切りとられた時―イギリスとドイツ第二次世界大戦下の学童疎開，京都市，阿吽社，ｖ（1993）。

2）長谷川潮・鳥越信編・著：はじめてまなぶ日本の戦争児童文学史，京都市，ミネルヴァ書房，269（2012）。

3）Gärtner, Nico. : *Operation Pied Piper: The Wartime Evacuation of Schoolchildren from London and Berlin 1938-1946*, Charlotte: Information Age Publishing, INC., 180 (2012).

4）Brown, Mike. : *Evacuees: Evacuation in Wartime Britain 1939-1945*. The History Press, 位置 151(2000. Ebook edition in 2013).

5）Bond, Michael. : *Bear and Forbear: A Life so far*. London: Harper Collins, 154 (1996).

7）イリスの会編・著　前掲書，54。

8）Brown，前掲書，位置 1926。

9）Gartner，前掲書，178。

10）Gartner，前掲書，180。

11）Bilson, Geoffrey. *The Guest Children: The Story of the British Child Evacuees Sent to Canada During World War II*. Fifth House , 1988.

Davis, Barbara. *Evacuee: From the Liverpool Blitz to Wales* Y Lolfa, 2016.

Etherton, Elaine nee Maccoby. *Ride A Cock-Horse To Banbury Cross: The Recollections Of A War-time Evacuee 1939-1945.* Mozo Publisher, 2007.

Hobbs, Pam. *Don't Forget to Write: The true story of an evacuee and her family*. Ebury Press, 2009. Random House Ebook,

Mann, Jessica. *Out of Harm's Way: The Wartime Evacuation of Children from Britain*. 2005. Headline Publishing Group, 2014.

Mawson, Gillian. *Britain's Wartime Evacuees: The People, Place and Stories of the Evacuations Told Through the Accounts of Those Who Were There*. Frontline Books, 2016.

-----. *Guernsey Evacuees: The Forgotten Evacuees of the Second World War.* The History Press, 2012.

Minx Jr., Charles C. *A Sandwich for the Journey: The Story of a London Evacuee*. NEWTYPE Publishing. 2020.

Merton, David. *Goodbye East End: An Evacuee's Story*. Corgi, 2016.

Summers, Julie. *When the Children Came Home: Stories of Wartime Evacuees*. Simon and Schuster UK Ltd., 2011.

Welshman, John. *Churchill's Children: The Evacuee Experience in Wartime Britain*. OUP., 2010.

Williams, Geofrey Lee. *Evacuees: Growing Up in Wartime Britain*. Amberley Publishing, 2013.

（主なものを著者のアルファベット順に記した。）

12）ベン・ウィックス：ぼくたちの戦争―イギリスの学童疎開，都留信夫・敬子訳，東京，ありえす書房，15（1992）。

13）ウィックス：前掲書，14。